報告

“アクション・ペインティング”再考
― 「具体」・アンフォルメル・抽象表現主義 ―

平井章一（関西大学）

「偶然・必然・自然」と「形象の生成」という観点から戦後美術をふり返る時、すぐさま想起されるのは、1950 年代に世界的に隆盛した“アクション・ペインティング”ではないだろうか。周知のように“アクション・ペインティング”という用語は、1952 年にアメリカ人美術批評家のハロルド・ローゼンバーグが発表した論文「アメリカのアクション・ペインターたち」から派生したものである。この論文でローゼンバーグは、「ある時、一群のアメリカの画家にとっては、カンヴァスが、実際のあるいは想像上の対象を再生し再現し分析し、あるいは“表現する”空間であるよりもむしろ、行為する場としての闘技場に見えはじめた」と、ジャクソン・ポロックやウィレム・デ・クーニングらの作品を、描くというアクション（ここでは手先だけでなく身体全体を使う動きを意味する）そのものを重視する新しい絵画として評価した。

このローゼンバーグの“アクション・ペインティング”の概念は、当時ニューヨークの知識人の間で流行したジャン＝ポール・サルトルの実存主義を色濃く反映しており、それゆえに第二次世界大戦という過酷な体験を共有するヨーロッパ、そして日本などでも共感を持って受け入れられた。そして同時代、ヨーロッパや日本など各地でアクションを強調する絵画が登場した理由もまた、実存主義的な時代精神と結びつけられ説明されてきた。

こうした“アクション・ペインティング”理解にあっては、画面の形象は行為の痕跡や残骸であり、すべて偶然の産物に過ぎないことになる。しかし実際には、今日“アクション・ペインティンター“としてみなされている画家たちすべてがそうであったわけではなく、そうした表現に至った経緯はさまざまであった。例えば日本における“アクション・ペインティング”の筆頭である白髪一雄は、構図や色彩観念のない「なまこみたいな絵」を描くという造形的な課題から、ペインティング・ナイフから指、さらには素足の使用へと展開し、画面上を滑走して描く描法を編み出した。また、ローゼンバーグが念頭に置いていたポロックについても、その描画はトランス状態で一気呵成に描く「闘技場」のイメージとはかけ離れた静的なものだったことが、記録映像から明らかになっている。

そこで本報告では、“アクション・ペインティング” をこうしたローゼンバーグの言説からいったん切り離し、アクションを強調する絵画というより広い視点から再定義したうえで、「具体」、抽象表現主義、アンフォルメルの“アクション・ペインティター”たちがアクションがもたらす「偶然・必然・自然」を「形象の生成」とどのように関連付け、作品に結実させたかを紹介する。それにより、彼らにとってのアクションの意味を再考するとともに、後半の討議の材料につなげたい。